

県道筑紫野・三輪線関係埋蔵文化財調査報告 3

山家人形原遺跡

福岡県文化財調査報告書

第 92 集

1 9 9 0

福岡県教育委員会

県道筑紫野・三輪線関係埋蔵文化財調査報告 3

山 家 人 形 原 遺 跡

福岡県文化財調査報告書

第 92 集

序

福岡県教育委員会では、県道建設に係わる埋蔵文化財の取扱いについては、企画・立案の段階から十分な配慮を頂くよう協議を重ね、関係各方面に埋蔵文化財の保護の協力をお願いしているところであります。県道筑紫野・三輪線建設に際しても同様で、ここに報告する筑紫野市に所在する山家人形原遺跡についても、事前に発掘調査を行って記録保存するはこびとなり、ここに成果の一部を刊行するにいたりました。

県道筑紫野・三輪線の発掘調査は昭和58年度から開始し、今回の報告はその第3冊目の報告書となります。

調査に際して尊い汗を流して頂いた地元の方々をはじめ関係各位の御協力に対して、深甚の謝意を表します。

平成2年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

1. 本書は、平成元年に福岡県教育委員会が福岡県土木部道路建設課から委託を受けて実施した、県道筑紫野・三輪線改修に伴って破壊される山家人形原遺跡の事前発掘調査の記録で、県道筑紫野・三輪線関係埋蔵文化財調査報告書の第3冊目にあたる。
2. 遺物整理作業は、九州歴史資料館において実施したが、接合・復原作業には岩瀬正信氏、遺物写真撮影には九州歴史資料館技術主査石丸洋氏の助力を得た。
3. 挿図製図には、豊福弥生・鶴田佳子氏の協力を得た。
4. 挿図で使用した方位はすべて真北である。
5. 本書の執筆・編集は小池史哲があたった。

本文目次

	頁
I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 遺構と遺物	7
IV おわりに	14

図版目次

	本文対照頁
図版 1 (1) 山家人形原遺跡遠景	1
(2) 山家人形原遺跡から山家集落を眺む	3
図版 2 (1) 現道路敷発掘区全景	7
(2) 現道路敷発掘区全景	7
図版 3 (1) 拡張A区全景	7
(2) 拡張A区全景	7
図版 4 (1) 拡張B区全景	7
(2) 拡張B区全景	7
(3) 拡張C区全景	7
図版 5 (1) 拡張C区全景	7
(2) 拡張D区全景	7
(3) 拡張D区全景	7
図版 6 (1) 1号土壌	7
(2) 2号土壌	7
図版 7 (1) 5号土壌	10
(2) 柱穴状ピット群	10
図版 8 (1) 調査風景 1 路床の剥ぎ取り	1
(2) 調査風景 2 表土剥ぎと遺構の掘り下げ	1
図版 9 (1) 調査風景 3 拡張部分の表土剥ぎ	1
(2) 調査風景 4 清掃作業	1
図版10 出土遺物	7

挿 図 目 次

	頁
第1図 山家人形原遺跡の位置と周辺遺跡	4
第2図 明治年間の周辺地形図	5
第3図 道路用地と発掘区域	6
第4図 遺構配置図	折込み
第5図 1～3号土壌実測図	8
第6図 4・5号土壌実測図	9
第7図 出土土器実測図1	11
第8図 出土土器実測図2	12
第9図 出土石器・土製品実測図	13

I はじめに

1. 調査の経過

県道筑紫野三輪線は筑紫野市山家から朝倉郡三輪町依井に通じ、筑紫地区と甘木・朝倉地区を結ぶ道路で、国道386号線とともに需要度の高い道路であるため、朝倉郡三輪町・夜須町内では新道建設を行うなどの改良がなされている。山家人形原遺跡のある部分は、道路幅が狭いことから拡幅によって改良されることになっている。

また県道南側一帯は県営圃場整備事業山家地区の施工区域であり、これに対しては筑紫野市教育委員会が埋蔵文化財の盛土保存の協議および発掘調査を担当した。昭和62年度は県道隣接地域、昭和63年度は夜須町境に近い丘陵部の発掘調査が実施され、弥生時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が多数発見された。なお、県道に沿っては用排水路が設けられる計画となっていたが、この水路部分は圃場整備施工区域から外れたかたちとなっていたので、筑紫野市教育委員会の発掘調査は水路用地部分にまでは及んでいなかった。しかし、昭和63年度末に排水路の工事が実施されているのを筑紫野市教育委員会の文化財担当職員が知り、埋蔵文化財の存在が予想される部分であるので、那珂土木事務所と県文化課・教育事務所を含めた協議が開始されることとなった。とはいえ、既に工事はかなり進行して掘削も済んでいたのでこの部分についての文化財調査は実施し得なかった。

那珂土木事務所は、平成元年度の5月25日付で文化財保護法57条の3の通知を提出するとともに、残された道路拡幅部分について筑紫野市教育委員会に文化財有無の照会を依頼した。

筑紫野市教育委員会は6月18日に試掘調査を実施して、遺構の存在が確認されたので、6月20日付で那珂土木事務所あて回答するとともに、福岡教育事務所にも通知した。

これを受けての協議が整い、調査の実務的な協議は8月4日に那珂土木事務所・福岡教育事務所・筑紫野市教育委員会の間でもたれ、本調査については隣接地域を調査した筑紫野市教育委員会が実施するのが最善の策であるものの、筑紫野市教育委員会側に時間的な余裕がとれない状態であったので、福岡教育事務所が本調査を担当することとなった。

試掘調査の成果から現道路敷にも遺構の存在が予想されて、現道路敷も発掘調査せざるを得なかったが、北側が九州電力山家変電所で南側が水路と水田であるために、排土の処理に苦慮することも予想されたのでまず現路床を剥ぎとって持出す方法をとることとなった。このような県道路建設課・那珂土木事務所の深い御理解で発掘調査を行うことになったのである。

発掘調査は平成元年9月22日から開始した。道路を全面通行止めにして、道路改良工事を担当する株式会社野田組のユンボを用いてアスファルト舗装とバラスの路床堆積土を除去することから始めたが、地表面には見えなかった旧排水路が暗渠のようにあって、これを設置する際

I はじめに

に破壊された部分がかかなりの部分を占めていた。なお変電所入口部分は諸般の事情で発掘区域から除外した。9月26日には埋蔵文化財関係の調査に慣れた作動のユンボも加わって遺構面までの堆積土を除去し、作業員を導入して遺構検出・遺構内の掘下げを開始した。実測作業もほとんど平行して行い、9月28日に現道路敷部分の全景写真撮影して、29日には拡張部分の表土剥ぎを始めた。

拡張部分には既に電柱が設置されていたので、電柱部分を除外し電柱間で便宜上A区からD区と区別することにした。この部分でも、新旧の水路工事による攪乱部分が半分以上を占めていて、遺構の残り方としては極めて限られた部分にみられるだけであった。拡張部分も実測・写真撮影し、10月11日には機材を撤収して発掘作業は完了した。

なお、遺物整理・報告書作成は九州歴史資料館において実施した。

2. 調査関係者

この調査の関係者は次の通りである。

福岡県土木部	部長	内田 勝士	
	道路建設課長	稲富 敏泰	
	地方道係長	宇留島素之	
	技術主査	田中 一美	
	那珂土木事務所	所長	首藤 勝憲
		総務課長	内田 耕二
建設課長		主計 勤也	
建設課第一係長		友岡 武	
	技術主査	岡部 修司	
福岡県教育委員会	教育長	御手洗 康	
	総括	文化課長	六本木聖久
		課長技術補佐	宮小路賀宏
		記念物係長	浜田 信也
	庶務	管理係長	池原 脩二
	事務主査	和田 健作	
調査	福岡教育事務所		
	技術主査	小池 史哲	

調査には、作業員として筑紫野市山家在住の方々が参加され、筑紫野市教育委員会からは種々の協力を得た。感謝したい。

Ⅱ 位置と環境

山家人形原遺跡は、福岡県筑紫野市大字山家に所在する。昭和62年度の筑紫野市教育委員会調査分を第1地点、今回調査した3984の2番地他の道路用地分は第2地点としておこう。

筑紫野市山家は、近世長崎街道の宿場町として栄え筑前六宿の一つに数えられていた。筑豊地区との境をなす三郡山塊・朝倉山塊間にある冷水峠から谷あいを降りて来て肥沃な筑紫平野に開ける辺りにある。朝倉から日田方面に通じる朝倉街道（豊後街道）もこの宿の南側の大又から通じていて、この付近が交通の要衝であったことが知れる。遺跡はこの山家宿現在の山家集落の東側に山家川を挟んで位置しているが、山家川は大根地山南斜面に源を発して長崎街道と沿いながら筑紫平野に出て、山家の2.5kmほど下流で筑後川の支流宝満川に合流する。

筑紫野市・夜須町にまたがる地域での埋蔵文化財調査は、国道200号線冷水バイパス建設に伴う発掘調査までは顕著でなかったが、バイパス関係で池田8・9号墳、池田遺跡、浮殿A・B・D遺跡、大島遺跡、八ヶ坪遺跡などが調査され、九州電力の高圧線新設や、県営圃場整備などに伴って山家地区遺跡（大島遺跡・中島遺跡）、中島遺跡・茶屋原遺跡・八ヶ坪遺跡・坂井田遺跡・宮ノ上遺跡、大木遺跡などが調査されてきた。圃場整備事業関係の調査で、広範囲にわたる遺構・遺物の存在が確認されたが、遺物整理・報告書作成が重要な課題であろう。

縄文時代の遺物は、池田遺跡の早期押型文土器、浮殿B遺跡・大島遺跡から後・晩期土器や石器類などが発見されている。

弥生時代では、大島遺跡で前期から中期にかけての住居跡・貯蔵穴・土壙など、また今回の山家人形原遺跡の南西150mほどの位置で中期初頭から中頃の甕棺墓群が発見されている。夜須町大木遺跡でも中期前半から中頃の甕棺墓・土壙墓群などが発見されている。

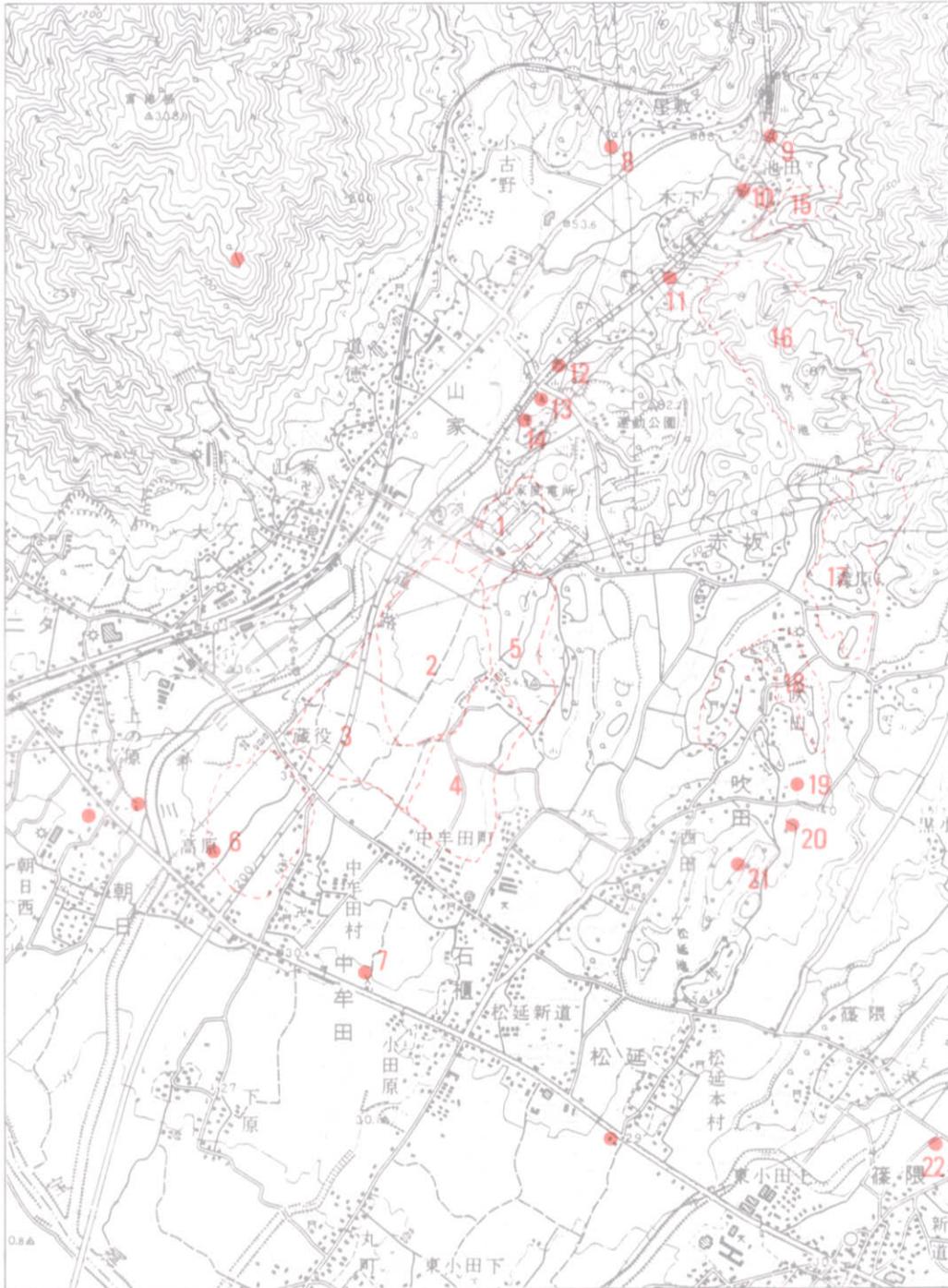
弥生時代後期後半・終末頃の遺構は、中島遺跡の甕棺墓を含む石蓋土壙墓群、大島遺跡の丘陵先端部から八ヶ坪遺跡・坂井田遺跡・宮ノ上遺跡一帯に広がり、坂井田遺跡で方形周溝墓群、宮ノ上遺跡では後期後半の住居跡から有鉤銅釧型が出土している。

古墳時代では、5世紀頃の遺構・遺物が大島遺跡で発見されているほか、浮殿A遺跡の石棺墓、6世紀後半頃の古墳は池田古墳群や牧の原古墳群・森原古墳群・吹田古墳群などにみられる。また、7世紀後半から8世紀にかけての遺物は大島遺跡などにも出土しており、八ヶ坪遺跡でもこの頃を前後する時期の掘立柱建物跡群などが多数発見されている。

中世の遺構では、浮殿A・B遺跡で地下式横穴や覆石土壙墓などが発見され、丸隈遺跡・池田遺跡でも遺物の出土がある。

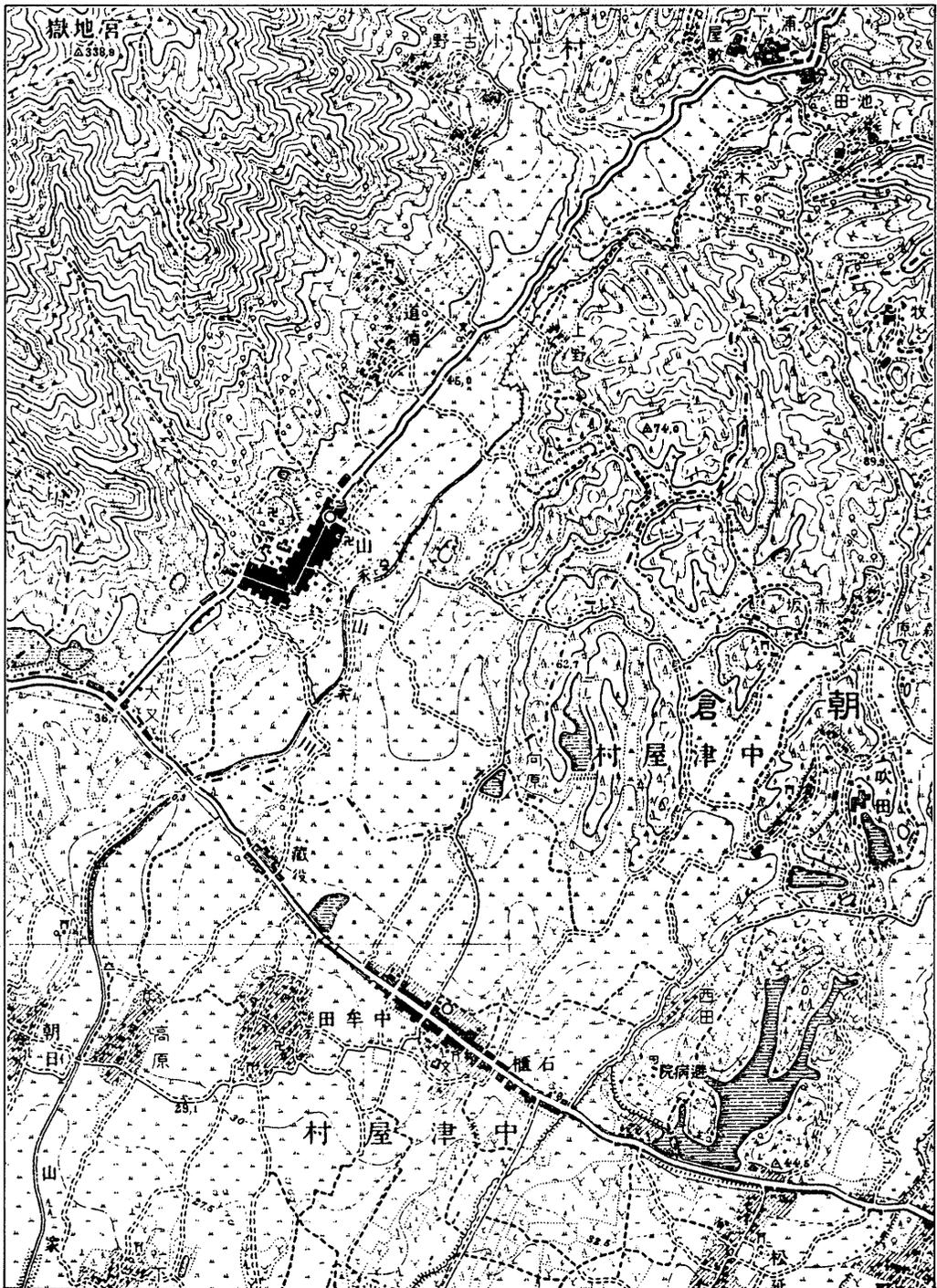
交通の要衝山家周辺は、第1図（4年前）と第2図（90年前）にみるように変貌している。数年先の地図には圃場整備の済んだ状態が表れられるであろう。

II 位置と環境



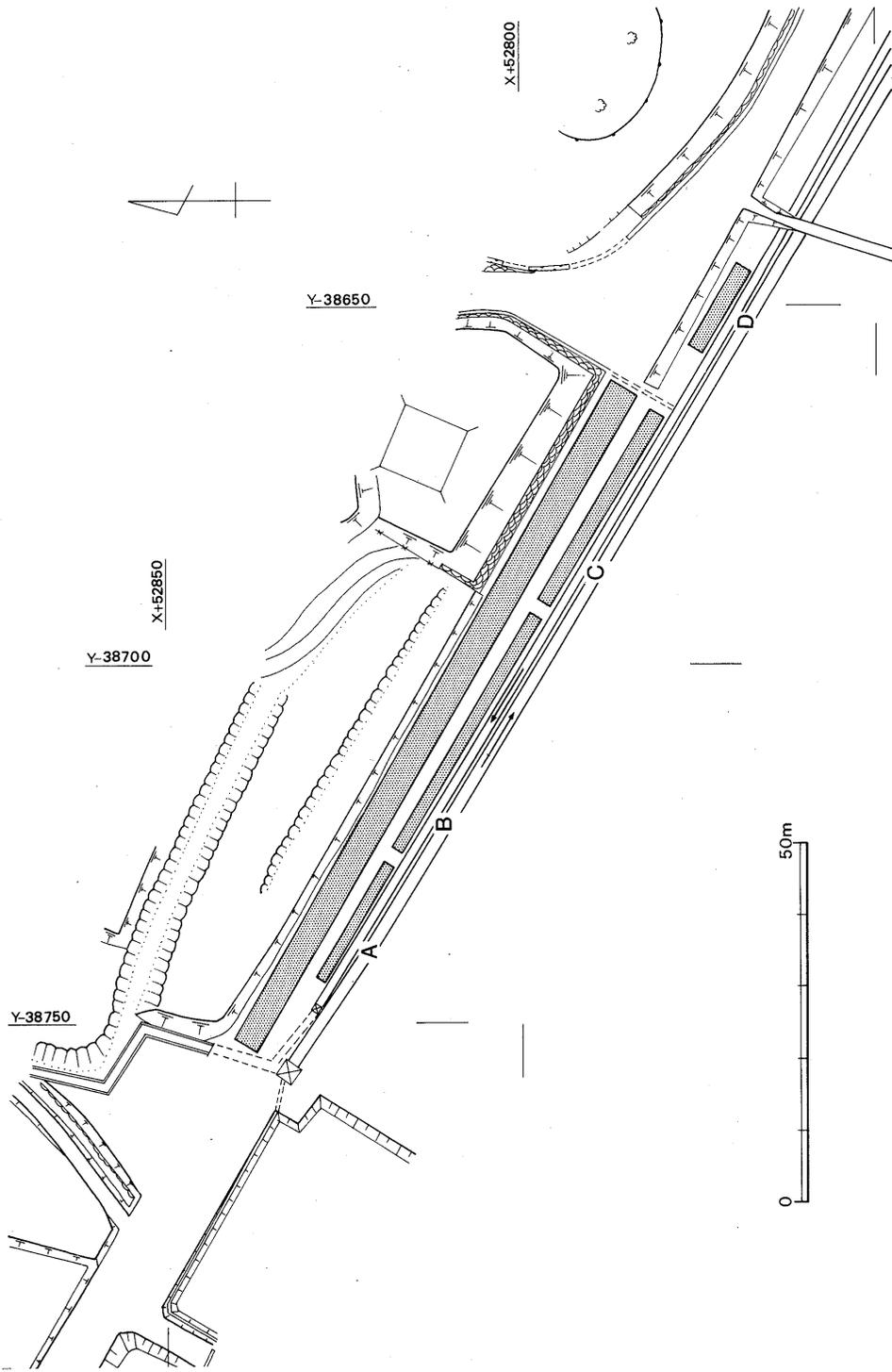
第1図 山家人形原遺跡と周辺遺跡 (1/20,000)

- | | | | | |
|--------------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 山家人形原遺跡 | 2. 大島遺跡 | 3. 八ヶ坪遺跡 | 4. 茶屋原遺跡 | 5. 中島遺跡 |
| 6. 坂井田・宮ノ上遺跡 | 7. 柘野遺跡 | 8. 丸隈遺跡 | 9. 池田9号墳 | 10. 池田8号墳 |
| 11. 池田遺跡 | 12. 浮殿A遺跡 | 13. 浮殿B遺跡 | 14. 浮殿C遺跡 | 15. 池田古墳群 |
| 16. 牧の谷古墳群 | 17. 森原遺跡 | 18. 吹田古墳群 | 19. 吹田遺跡 | 20. 鷲尾山2号墳 |
| 21. 鷲尾山1号墳 | 22. 大木遺跡 | | | |

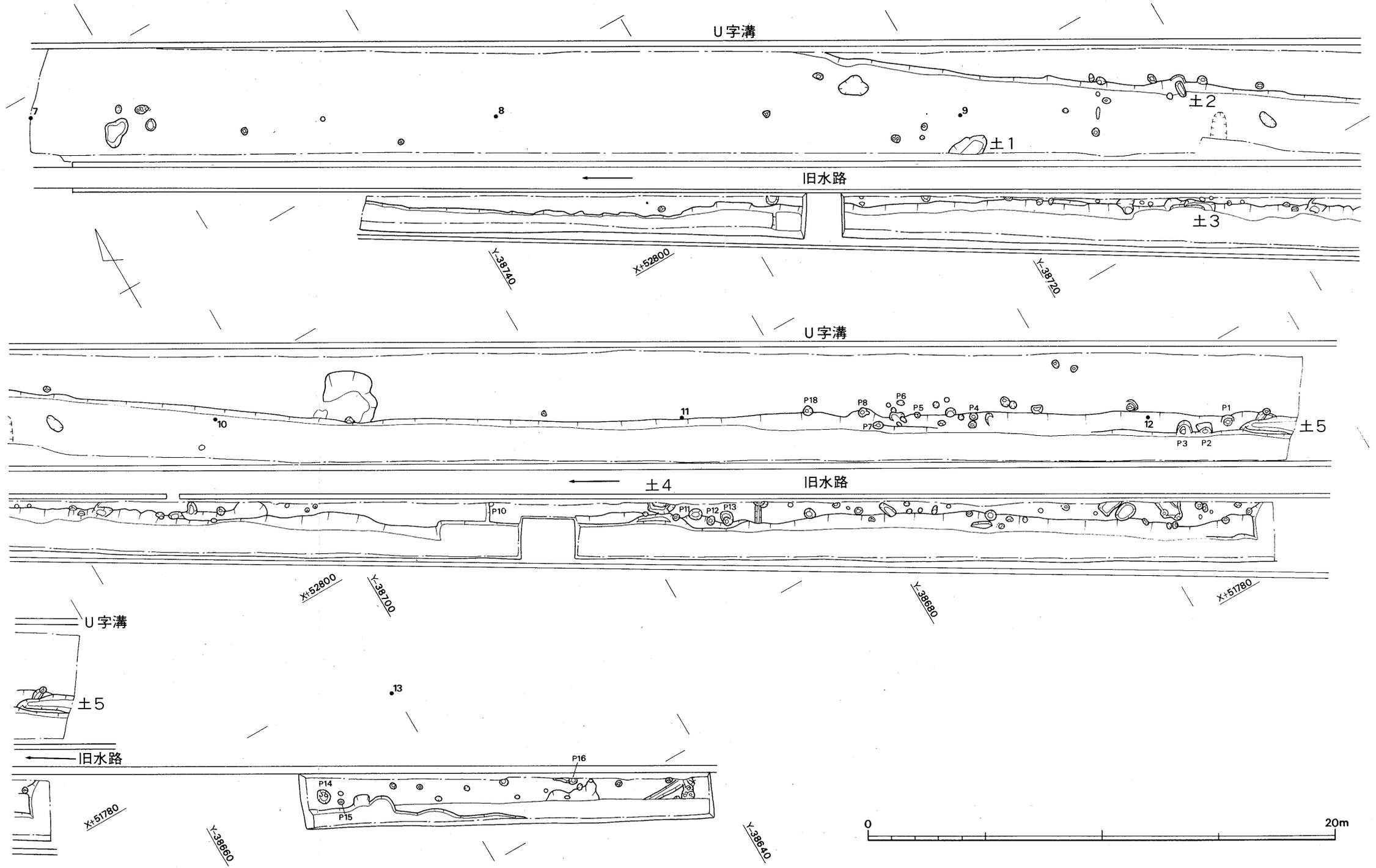


第2図 明治年間の周辺地形図 (1/20,000)

II 位置と環境



第3図 道路用地と発掘区域 (1/1000)



第4図 山家人形原遺跡 遺構配置図 (1/200)

Ⅲ 遺構と遺物

山家人形原遺跡第2地点では、現道路敷で起点側（北西側）のNo.7点からNo.12点の7.0m先までの部分の長さ107.0m、幅4.5mの発掘区と、約1.8mの距離をおいて拡張部分の発掘区が1.4～2.2m幅で設定した。拡張A区はNo.7点より約14m先の位置から約19mの長さで、拡張B区は1.5mの間をおいて38.3mの長さに、拡張C区はさらに2.0mの間をおいて30mの長さに設定し端はNo.12点の先5.4mの位置である。また拡張D区はNo.12点の先16.0mの位置から13.8mの長さに設定した。（図版2～5、第3図参照）。

これらの発掘区で遺構確認を行った結果、現道路敷は丘陵斜面を横断するように設けられ、道路工事時の削平と旧水路設置時の掘削、昭和63年度に設置された丘陵側端のU字溝と、拡幅部端の新設水路工事の掘削で大半を失っており、これらの影響を受けなかった部分がわずかに帯状に残る。削平・掘削をまぬがれた部分では、土壌5基と、掘立柱建物を構成すると思われるもののその配置の不明確な柱穴を含めた多数の柱穴状ピットが検出された（第4図）。

1号土壌（図版6-1、第5図）

No.9点のすぐ南側にあり、主軸方位をN68°Eにとる土壌で、南西側を旧水路工事によって失って長さは不明。現存長は最大1.50mを測る。上縁での小口側の幅は0.70mだが、中ほどにかけて幅広になり1.2m幅程度である。深さは0.45mから0.73mを測り、北側が浅めで南側に深くなっている。北側の壁には凹凸が多く、幅0.55mの床面に掘り込みはない。土壌内の堆積土は上部が暗灰色土、下部は暗茶褐色土の粘性土で、遺物の出土はみられなかった。

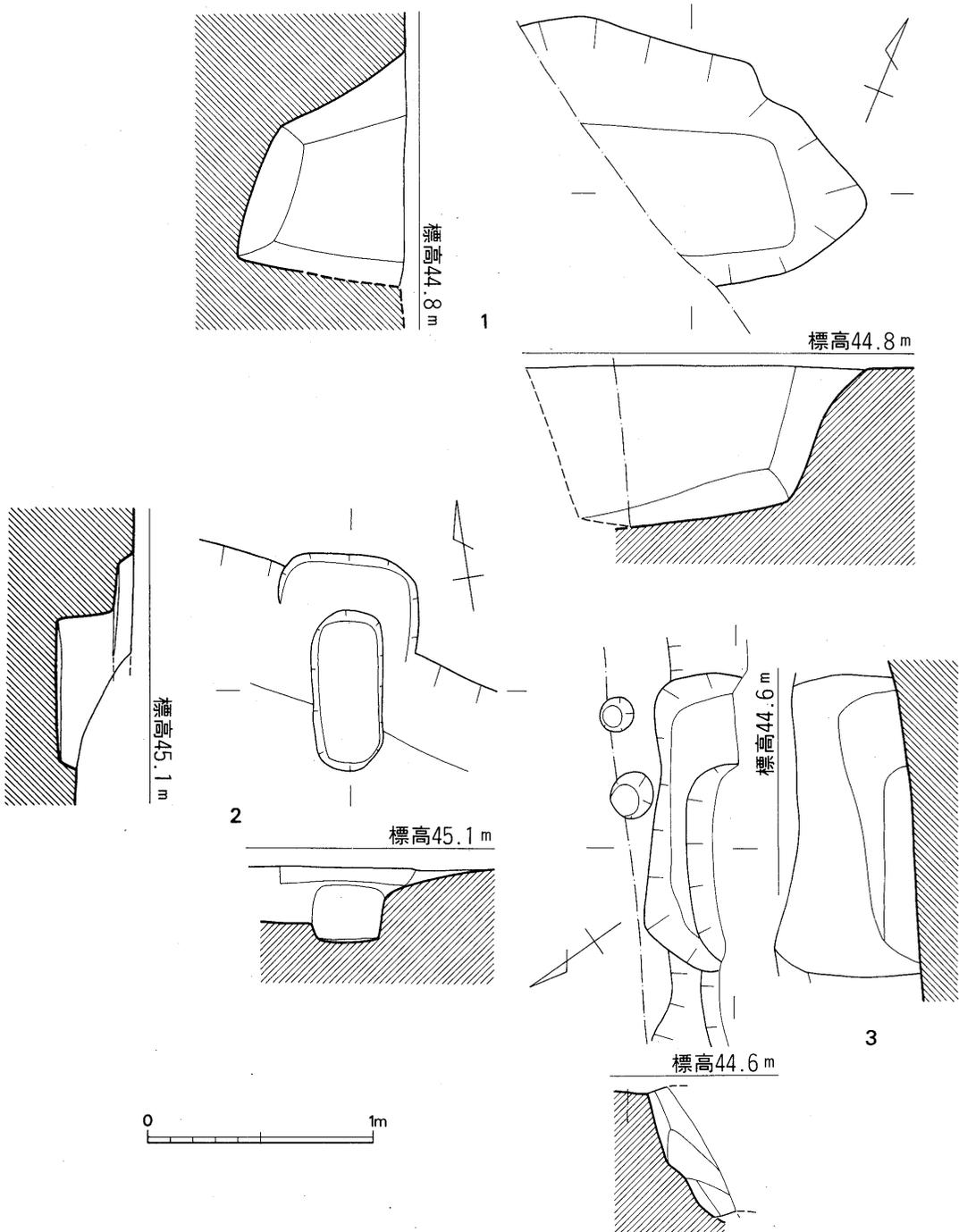
2号土壌（図版6-2、第5図）

1号土壌の約10m東側にあり、主軸方位をN9°Eにとる隅丸長方形プランの二段掘りの土壌で、南側の上部を道路工事の削平によって失う。現存長0.95mで1.2m程の長さがあったものと推定される。1段目掘り込みの上縁幅は0.62m、深さは0.07～0.08mと浅い。2段目掘り込みは、上縁の現存長0.71m、幅0.32mで、0.25mの深さである。床面は長さ0.63m、幅0.50mを測る。側壁と床面の端などで棺材の痕跡を捜したが特に痕跡はみられなかった。なお写真では、この際に少し掘り過ぎたあとに清掃した状態で写っている。土壌内の堆積土は暗茶褐色土の粘性土で、遺物の出土はみられなかった。

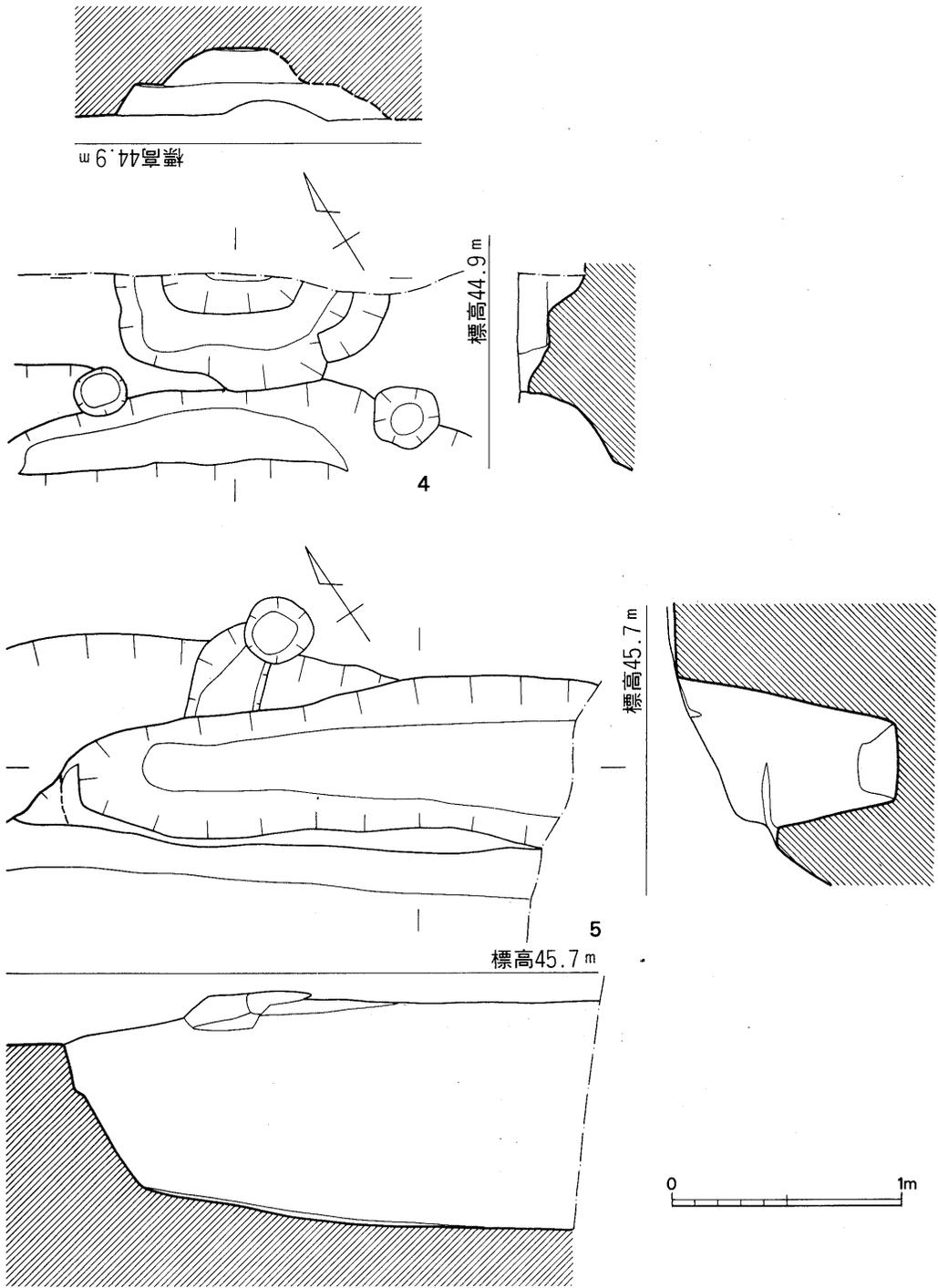
3号土壌（第5図）

2号土壌の約5m南側にあり、主軸方位をN35°30'Eにとる、隅丸長方形プランの二段掘りの土壌と推定される。新設水路工事の掘削による攪乱によって大半を失い、現存する長さは0.35m分である。一段目掘り込みは上縁幅1.30m、深さ0.40m程度で、二段目掘り込みは幅0.85m、深さ0.15mを上回るようだが攪乱のため不明である。土壌内の堆積土は上部が暗灰色土、

Ⅲ 遺構と遺物



第5図 1~3号土坑実測図(1/30)



第6图 4·5号土壤实测图(1/30)

Ⅲ 遺構と遺物

下部は暗茶褐色土の粘性土で、上部から弥生土器片・土師器片が若干出土した。

出土土器

甕（第7図1） 如意形口縁を呈する口縁部破片で、復原口径は25cm程になろう。やや強めに外反する口縁部はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整、外面は風化しているが板状原体によるナデかハケ目調整であろう。胎土に砂粒を若干含み、焼成は良好である。

4号土壙（第6図）

No.11点の南西4mの位置で、拡張C区のB区寄りにある土壙。主軸方位をN32° Eにとり、隅丸長方形プランの二段掘りの土壙と推定される。旧水路工事と掘削による攪乱によって大半を失い、現存する長さは0.45m分である。またすぐ南まで新設水路工事の掘削が及んでいて小口側の上縁の一部も削られている。1段目掘り込みの上縁幅は1.20m、深さは0.13～0.16mである。2段目掘り込みは、上縁の幅0.60mで、0.15m程の深さがあるが、小口端が残るだけで長さは不明。土壙内には暗茶褐色粘性土が堆積し、弥生土器片が3点出土した。

出土土器

小破片で特徴のある部位がないので図示しえない。弥生中期ないし後期らしく、1点は外面に細かいハケ目がついている。

5号土壙（図版7-1、第6図）

現道路敷発掘区の南東端にあり、南東側は発掘区域外に伸びる。かろうじて残された丘陵斜面に直交する主軸方位N56° Wに、溝のように細長く掘り込まれているが全体の長さは不明。上縁では、確認した長さ2.30m、最大幅0.72mだが、南側には道路工事時の削平も及んでいるので、本来はもう少し幅広であったと推定される。深さは小口部で0.70m、発掘区端で0.97mを測り、小口に向かって浅めになっている。床面は最大幅0.40m、小口部幅0.20m、確認長は1.85mを測る。床面での掘り込みはみられない。土壙内堆積土は上部2/3が暗灰色土、下部は暗茶褐色土の粘性土だが、1～4号土壙の堆積土よりも黒っぽい色調である。

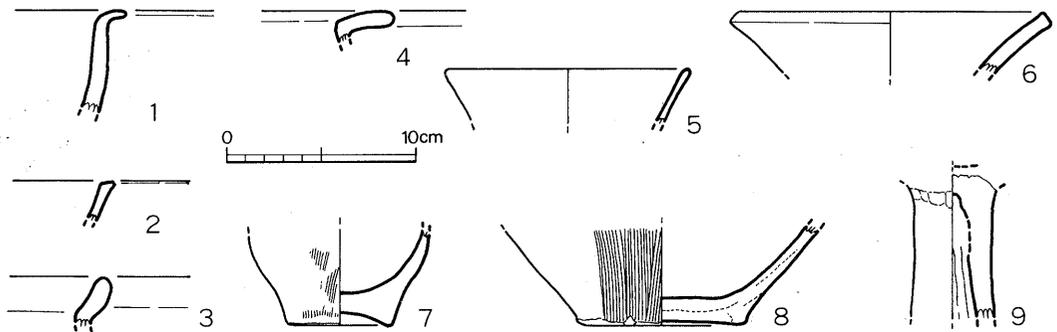
上部堆積土を中心に弥生土器・土師器・須恵器片が出土した。

出土土器（第6・7図2・3・10・14・17・18・25）

2・3は、弥生土器の口縁部破片である。2は全体にヨコナデ調整されて、口唇部上端は面取りされている。胎土に砂粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。3は甕の口縁部であろう。頸部から外反する口縁部は厚めで端部で内湾する。全体にヨコナデ調整され、頸部外面は縦方向ハケ目の痕跡がみられる。胎土に砂粒を含み、淡黄褐色に良く焼成されている。

10は鳥嘴状口縁部をもつ須恵器杯蓋破片で、口径規模は不明。精良な胎土で暗青灰色に堅緻に焼成されている。14は高台の付く須恵器杯身破片である。

17・18は土師器甕と思われる口縁部破片。18の口縁部はやや肥厚気味で体部内面はヘラケズリされている。胎土に石英粒などを若干含み、焼成良好で淡褐色を呈している。



第7図 出土土器実測図1 (1/4)

25は土師器皿の破片で、径は不明。丁寧なナデないしヘラミガキされている。精良で褐色粒を含む胎土で、淡褐色を呈している。

このほか、図示していない破片では、土師器甕ないしは甑と思われる破片がいくつかあり、弥生中期の丹塗磨研土器片もみられる。

柱穴状ピット

掘削・削平を受けていない部分からは、ほぼまんべんなく柱穴状ピットが検出された。しかし、それぞれのピットがどのように組合わさって建物が建っていたのかは分らない。またこれらのピットのうち約1割強の19ピット（遺構配置図に番号で示す）から遺物が発見された。

出土遺物（第7～9図）

P 1では須恵器・土師器小破片が出土した。20・21は外反する土師器甕？の口縁部破片。20は金雲母を、21は砂粒を若干含み、淡褐色に焼成されている。P 2・3からは21に似た胎土・色調の土師器甕？小破片、P 4からは土師器皿破片が出土した。

P 5からは5のヨコナデ調整されて、直線的に外へ開く口縁部破片と、22・23の土師器片が出土した。22は口縁部の肥厚する甕で、体部内面はヘラケズリされている。砂粒を多く含む胎土で暗茶褐色に焼成されている。23は杯の底部であろう。外底面には板目圧痕らしい痕跡がみられる。胎土に金雲母・褐色粒を含み淡褐色に硬く焼成されている。また、第9図の台形様石器も出土した。伊万里湾周辺産の黒曜石縦長剥片を折断し折断部に調整剥離を加えたもので長さ2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.55cmの大きさである。

P 8では第9図3の管状土錘が出土した。長さ5.2cm、最大径1.1cmの大きさで、褐色粒を含むが精選された胎土で淡い明褐色を呈している。

P 6・9では弥生中期頃の甕底部付近の破片が、P 7では弥生土器片、P 10・14・15では土師器片、P 11では須恵器長頸壺ないしは平瓶らしい体部小破片が出土した。

P 12では7の壺底部破片が出土した。外底面は中凹みでナデ調整、胴部は丸味をもって膨らみ外面は縦方向にハケ目調整されている。胎土に砂粒を多めに含み淡い橙色に焼成される。

Ⅲ 遺構と遺物

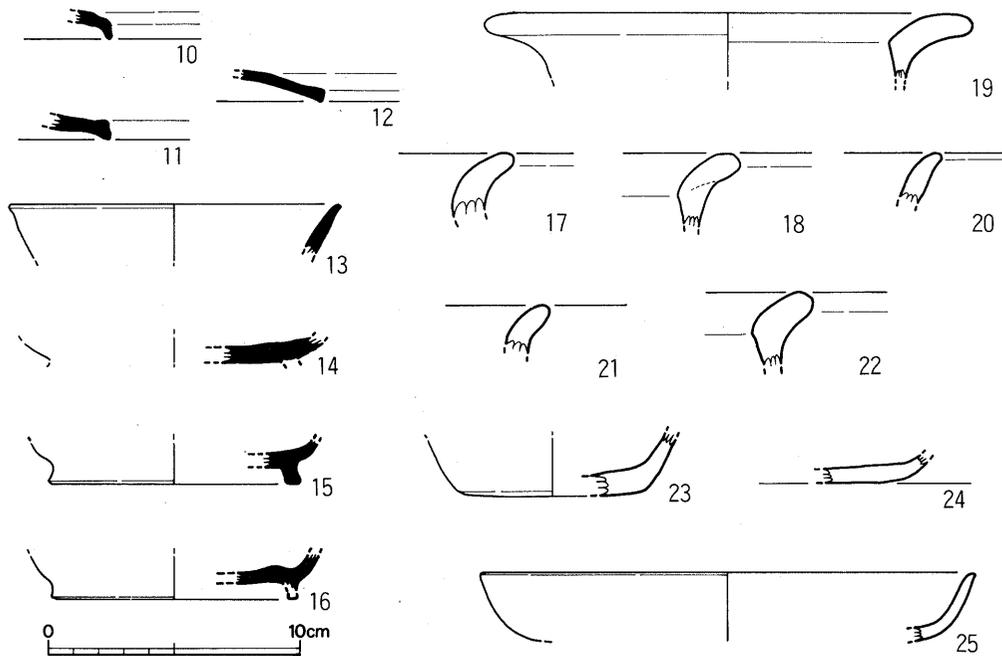
P13では16の須恵器杯身片と25の土師器皿片，土師器甕片が出土した。16は安定した高台が付くもので高台が欠けているが，高台外径8.9cm程度であろう。胎土に砂粒を若干含み堅緻に焼成されて淡青灰色を呈している。25は復原口径19.6cm，残存器高2.8cmの大きさの皿で，器面風化のため調整手法は不明。細砂粒・金雲母・褐色粒を胎土に含み淡めの明褐色に焼成されている。

P16では6の口縁部片と，丹塗磨研土器片・弥生土器底部付近片などが出土した。6は復原口径17cm程度の口縁部片で，外反気味に開いて端部は面取りされている。器台の破片であろうか。細かめの砂粒・角閃石・褐色粒を胎土に含み暗黄褐色に焼成されている。

P17では8の弥生土器甕底部破片と，土師器甕破片が出土した。8は底径0.9cmの大きさでナデ調整の外底面はわずかに凹む。胴部外面は縦方向のハケ目調整，内面は板状原体を用いたナデ調整がみられる。砂粒を若干含み焼成良好で淡めの暗黄褐色を呈している。

P18では19の肥厚しく強く外反する口縁部をもつ土師器甕破片が出土した。復原口径19.4cmの大きさで砂粒を多めに含み茶褐色を呈している。

P19では15の須恵器杯身片が出土した。やや踏張るような高台が付き，高台外径0.9cmの大きさ。砂粒をわずかに含み堅緻に焼成され暗青灰色を呈している。

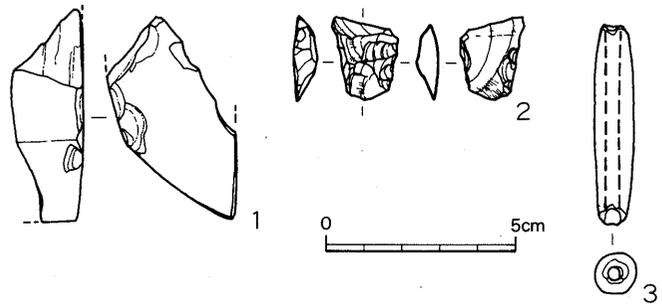


第8図 出土土器実測図2 (1/3)

包含層出土遺物

(第7～9図)

4・9は拡張B区北端部から出土した。4はL字状に屈曲する甕口縁部破片で、砂粒をやや多めに含み淡い明褐色。9は高杯の柱状部破片で現存部での径4.4cm



第9図 出土石器・土製品実測図(1/2)

を測る。外面は器面風化し調整手法不明、内面には絞り痕がみられる。杯部側の剥離面では接合を強化するためか凹凸が付けられている。砂粒を胎土に含み暗黄褐色を呈している。

11は拡張C区北西端部から出土した、鳥嘴状口縁部をもつ須恵器杯蓋の破片。焼成堅緻で青灰色。12・13はNo.11点付近から出土した。12は退化した鳥嘴状口縁部をもつ須恵器杯蓋の破片で、強く焼成されて淡い灰色。13は復原口径13.2cmの大きさの須恵器杯身片。焼成堅緻で暗青灰色を呈している。

第9図1はNo.11点の南東方から出土した。頁岩製の柱状片刃石斧で、刃部の側縁部だけが残っている。風化が進んでいる。

その他の遺構

風倒木 No.10点の南東4～7mの部分で風倒木の痕跡がみとめられた。上縁では外径が2.8mある。砂を含む黒色土が環状にあり、北東側では幅1.0m程度あるものそれ以外の部分では0.3～0.5mである。南側の道路工事時の削平による崖面で見ると、外側45°前後、内側60°前後の傾斜で内側に入るかたちに黒色土が潜る。

溝状遺構 拡張D区の南東端部分ではほぼ東西に流路をとる小溝が検出された。現存する長さ1.75m、上縁での幅0.25～0.30m、深さ0.30m前後で断面U字形を呈する。濃い暗茶褐色の色調の、砂を若干含む粘性土が堆積していた。遺物は全く含まれていなかった。

このほかにも、4号土壌の約4m南東に1条、5号土壌の上部に1条の小溝が検出された。現存する長さが短い。いずれも堆積土は砂を含む暗灰色の粘性土で、5号土壌の上部堆積土と似ている。遺物は出土していない。

谷 拡張D区の南東端部分では、遺構面が深くなっている。第1地点での調査や試掘調査の結果では、その先は谷状をなしているという。現在、変電所施設のある部分が地形的に高く、圃場整備の終了した平坦な田面が続くので、判断し難いが、古い地図と比較すると、変電所の部分ではもとは谷をなしていて、盛土されていることが知れる。

IV おわりに

山家人形原遺跡第2地点から出土した遺物では、台形様石器というような旧石器時代もしくは縄文時代後期の遺物が1点あるが、主体になるのは弥生時代中期初頭から中頃、8世紀前半から後半にかけての時期の遺物である。

2号・3号・4号土壌は、いずれも二段の掘り込みをもち、堆積土も同様なので、3号土壌出土の1土器などの示す弥生時代中期初頭から中頃のものと考えられる。1号土壌もこれに近い可能性が高い。5号土壌は主軸方向が異なり、出土遺物に奈良時代のものを上部に含んでいるので、奈良時代に近い時期を求めるべきであろう。

柱穴状ピット群も、この2つの時期に近いものであろうが、今回の調査では具体的な内容を理解し難い。

山家人形原遺跡第2地点では、このように遺構が部分的に残されていたが、隣接する第1地点と総合して考えるべきであろう。調査を実施しえなかった新設水路の部分は両者の間に空白をつくっている。柱穴状ピット群はおそらく一連のものであろうし、土壌も群を構成していた可能性が高い。この意味でこの空白部分は重要であった。もう少し早く文化財関係の協議がなされていればと思えば残念でもある。

圖 版



1. 山家人形原遺跡遠景



2. 山家人形原遺跡から山家集落を眺む

1. 現道路敷発掘区全景（南東から）



1. 現道路敷発掘区全景（北西から）





2. 拡張A区全景（南東から）



1. 拡張A区全景（北西から）



1. 拡張B区全景（北西から）



2. 拡張B区全景（南東から）



3. 拡張C区全景（北西から）



1. 拡張C区全景（南東から）

2. 拡張D区全景（北西から）

3. 拡張D区全景（南東から）



1. 1号土壤



2. 2号土壤



1. 5号土壌



2. 柱穴状ピット群（西から）



1. 調査風景1 路床の剥ぎ取り



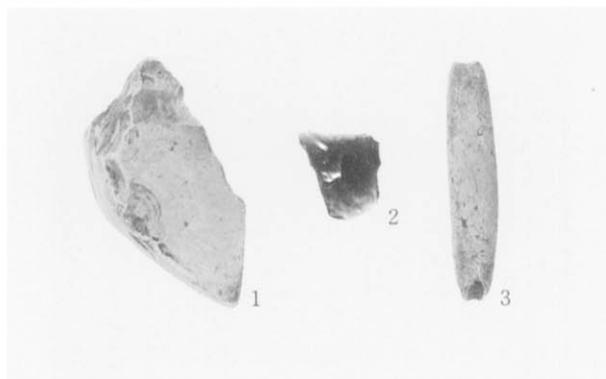
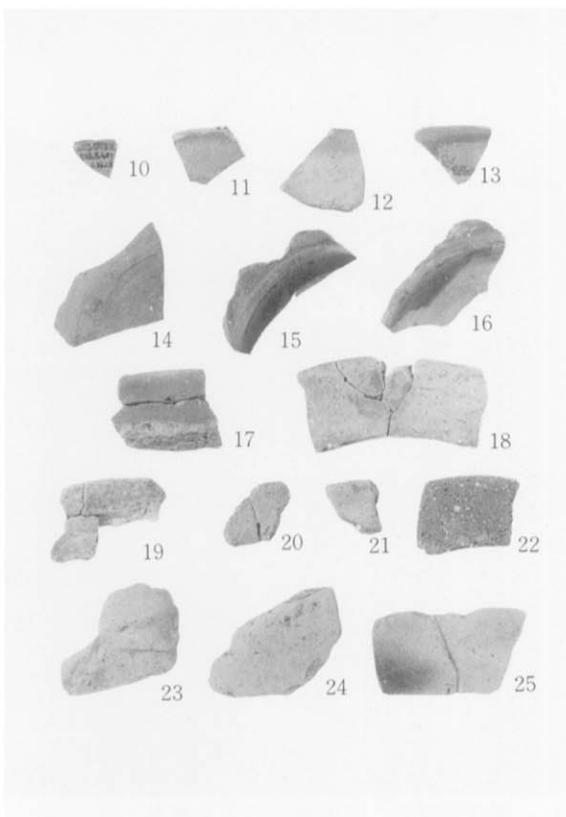
2. 調査風景2 表土剥ぎと遺構の掘り下げ



1. 調査風景3 拡張部分の表土剥ぎ



2. 調査風景4 清掃作業



山家人形原遺跡

福岡県文化財調査報告書 第92集

平成2年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 元	登録番号 8